

銅鐸の謎を探る

(日本書紀に記事がない銅鐸の秘密)

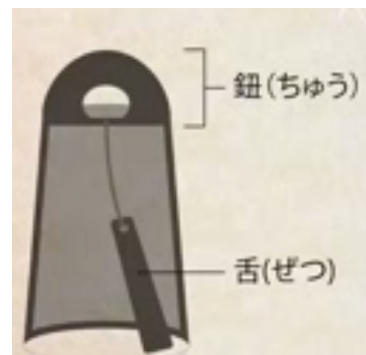
1 銅鐸とは

銅鐸とは、弥生時代に青銅製の鋳物でつくられた、つり手=鈕(ちゅう)と振り子=舌(ぜつ)をそなえ、紋様を有するベルです。銅鐸の発見は『扶桑略記』(ふそうりやくき)天智天皇7年(668)条に滋賀県大津市に崇福寺(すうふくじ)を建立する際、宝鐸(ほうたく)が発見されたとするものが最古の記録です。『続日本紀』(しよくにほんぎ)和銅6年(713)には、奈良県宇陀郡長岡で銅鐸発見の記載があり、すでに「銅鐸」という名が記されています。

また、10世紀には「阿育王」(アショカおう)の宝鐸という説が提唱されるなど古くからの研究蓄積があります。聞きなれない難解な銅鐸の部分名称も先達から受け継いだ研究の賜物であり、その名称を受け継ぎながら研究が行われています。銅鐸が謎とされているのは、銅鐸が一般に当時(弥生時代)のムラや墓から出土することが極めて稀で、多くが小高い丘陵の斜面に、銅鐸だけで埋められているからです。

2 銅鐸のかたち

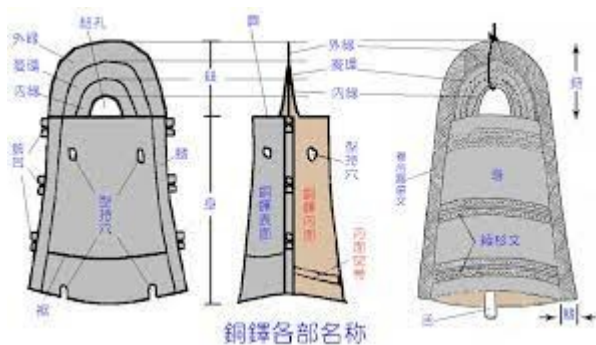
銅鐸は、つり手「鈕」(ちゅう)とバケツをひっくり返したような「身」(み)、つり手から身にかけて張り出した「鰭」(ひれ)から成り立っています。銅鐸は本来、内面に振り子「舌」を下げたベルです。銅鐸内面の末端付近には、断面形が台形や蒲鉾形(かまぼこがた)の突帯(とったい)がめぐっています。内面に舌を取り付け、つり手を揺することで舌がこの突帯部分に触れあい共鳴します。



古い銅鐸には、青銅製や石製の舌を伴って出土したものがあ、内面上部に舌を下げるため「環」(かん)を取り付けた銅鐸(有環銅鐸)もあります。また、内面突帯(ないめん とったい)が舌との摩擦によって磨り減った銅鐸も認められます。

鈕(ちゅう)は、銅鐸をつり下げる部分で、本来は断面形が菱形をした半環状のものでしたが、後に装飾が加わり兜形(かぶとがた)から小判形(こばんがた)に変化します。古い銅鐸には鈕と結んだ紐とが摩擦した痕跡をとどめるものがあり、木の枝などに銅鐸を紐(ひも)でつり下げて使用していたと考えられます。

身(み)は、扁平(へんぺい)な筒形を呈しています。身の上面と上半・末端の左右には各々両面に孔があります。この孔は銅鐸を鋳造する際に、二枚の外型と内型を固定するために生じるもので「型持孔」(かたもちあな)と呼んでいます。(下図)



銅鐸が大形化すると身も裾(すそ)開きの円筒形のものへと変化します。

鰭(ひれ)は、鈕から身の末端付近まで連なる板状の装飾部分で、銅鐸を鋳造する際、二枚の鋳型からはみ出した甲張(こうばり)が装飾化したものと考えられます。

3 銅鐸の分類

銅鐸の多くが集落から隔離した丘陵の斜面から銅鐸のみで出土するため、銅鐸研究はまず銅鐸そのものを分類して新旧を決めなければなりません。古くは銅鐸の紋様によって分類する方法が試みられましたが、佐原真氏による鈕による分類が提唱されてから銅鐸研究は飛躍的に発展しました。

鈕分類は、本来ゆり鳴らすベルとして半環状のつり手に注目し、実用品から装飾が加わり非実用的なものへ変化するさま(ルジメント)をとらえ、断面系が菱形の素環状のもの「菱環鈕式」(りょうかんちゅうしき)から、その外縁にも装飾がつく「外縁付鈕式」(がいえんつきちゅうしき)もの、菱環部の外縁と内縁に装飾をもつ「外縁付内縁付鈕=扁平鈕式」(へんぺいちゅうしき)もの、さらには紋様の輪郭を著しく太い線=突線(とっせん)で画する「突線鈕式」(とっせんちゅうしき)ものの4つに大別しました。



また、外縁付鈕式と扁平鈕式を2つに、突線鈕式を5つに細分化されました。現在では、佐原分類をもとに菱環鈕式(2型式)、外縁付鈕式(2型式)、扁平鈕式(2型式)、突線鈕式(9型式)に細分され、さらに北部九州と中国地方、四国、瀬戸内、東海地域などで銅鐸の地域色も明らかにされています。

佐原氏は、銅鐸と弥生土器の紋様についても比較研究を行いました。そして、外縁付鈕式の銅鐸流水紋(りゅうすいもん)が弥生時代中期初頭の土器流水紋を写し取ったもので、外縁付鈕式が弥生時代中期初頭にあたることを指摘しました。また銅鐸紋様はすべて弥生土器に共通する紋様であり、銅鐸が共同社会の祭器として用いられたと考えました。

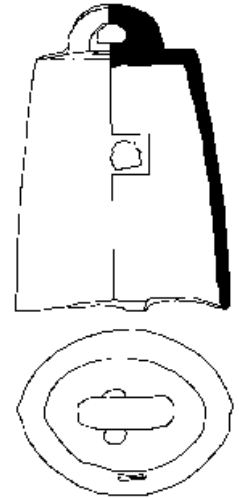
4 銅鐸の紋様

銅鐸には何らかの紋様が鑄込まれています。

銅鐸の祖形として有力なものに朝鮮小銅鐸(ちょうせんしょうどうたく)(右図)がありますが、朝鮮小銅鐸には紋様がなく、銅鐸はわが国で独自の紋様が鑄込まれ成立したものです。

銅鐸紋様はすべて鑄型面に刻み込まれた凹線が、青銅を鑄込むことによって凸線となって浮かび上がり、紋様や絵となって表わされます。

絵には線画によって表現されるものと幅広い線や面を鑄型に刻み、陰影様に浮き出す表現方法がみられますが、紋様はほぼ一様に線画で刻まれ、表現手法に違いがあります。



身にみられる紋様は、横方向の区画帯を用いた「横帯紋」(おうたいもん)、縦横に区画帯をめぐらせた「袈裟襷紋」(けさだすきもん)、平行直線紋を屈曲反転させた「流水紋」(りゅうすいもん)の大きく3つに分類できます。

また、身の区画内には「斜格子紋」(しゃこうしもん)を多用し、横帯には「綾杉紋」(あやすぎもん)や「斜格子紋」「連続渦巻紋」(れんぞくうずまきもん)を、縦横帯が交差する部分には稀に「木葉紋」(このはもん)や「重画紋」(じゅうかくもん)などを配置します。

鈕の外縁から鰭にかけてはふつう「鋸歯紋」(きょしもん)をならべます。鈕外縁には「鋸歯紋」「渦巻紋」(うずまきもん)「重弧紋」(じゅうこもん)などを、断面が菱形の菱環部には多くが「綾杉紋」を施しています。鈕の内縁は無紋とするか「鋸歯紋」や「重弧紋」を配置します。

身の下部は「下辺横帯」(かへんおうたい)と呼ぶ横帯で仕切り、ここには「鋸歯紋」「連続渦巻紋」などをならべ、裾(すそ)とよぶ下部には紋様を施しません。

5 銅鐸の絵

絵は、初期の銅鐸から認められますが、銅鐸全体からすると3割程に過ぎません。

また、外縁付鈕式までの銅鐸に多く、扁平鈕式以降の大形銅鐸は絵が少なく、画題も鳥とシカに限られています。絵として描かれる画題には、シカ、鳥、人物、スッポン、トンボ、カエル、イノシシ、トカゲ、魚、カマキリ、高床建物などがあり、稀にサル、舟、僻邪（へきじゃ）などがあります。作者が自由に描いたとすれば、様々な絵があっても良いのですが、画題は限られシカと鳥が数多く描かれています。



国宝銅鐸として有名な伝香川県出土銅鐸（左図）、神戸市桜ヶ丘4号・5号銅鐸、出土地不詳谷文晁旧蔵銅鐸の4つの銅鐸は、ほぼ似通った絵と構成をもつことから、同じ作者によってつくられた一連の作だと考えられます。この銅鐸よりも更に古い時期につくられた福井県井向（いのむかい）銅鐸もよく似た画題が描かれています。このことから銅鐸の絵には弱肉強食や農耕賛歌といった一連の物語がうたわれているとする解釈が有力です。

人物は、弓矢をもつ狩人のほかに、盾と戈をもつ武人、脱穀（だっこく）をする人、ケンカの仲裁をする人、I字型工具をもつ人（魚とり）などがいます。先の一

連の銅鐸では女性を△頭、男性を○頭で表現しています。鳥は祖先の霊（祖霊）や穀物の霊（穀霊）を招く神聖な動物だったと考えられます。弥生時代のムラからは鳥形の木製品が出土することがあり、朝鮮半島では村の出入口にソッテという鳥竿（ちょうかん=鳥形木製品を取り付けた竿）を立て、祖霊を祀っています。

シカは単独で描くほか、列で描かれるもの、背中に矢を負ったシカや大きな角をもつシカと狩人が一対で表現されたものなどがあります。鹿は最も利用価値のある狩の対象物として、また弥生人にとって豊穡を表す象徴だと考えられていたのかもしれません。



絵が描かれる部分は、銅鐸の鈕、身の横帯や区画内、裾などに多く、特に鈕部分は紋様間の狭い部分に絵をならべるものがあり、身の上面にまで絵を描いた銅鐸もあります。また、稀に天地を逆さにして描かれた絵もあります。裾に紋様を施すことは稀ですが絵は裾にも描きます。反面、鱗は紋様でうめ、絵を描くことはほとんどありません。

6 銅鐸の铸造

（写真：銅鐸の復元铸造：神戸市桜ヶ丘12号銅鐸）

銅鐸は銅と錫（すず）の合金「青銅」で造られ、これに少量の鉛（なまり）が含まれています。銅は融点が1084度と高く、溶解するためには1100度以上の高温を要します。



そのため、融点の低い錫(231.8度)、鉛(327.4度)を混ぜることで、より容易に鑄造を行ったと考えられます。成分比率は銅が全体の8~9割を占め、錫は10%あまり、鉛はごくわずかで特に比重が高い鉛は少量が混入されたとみられます。

これらの原料はどこから入手したのでしょうか。原料のうち鉛から原産地を推定する方法が研究されています。鉛は比重の異なる4つの同位体からなり、これらの同位体が表示構成比率は産出地ごとに異なっており、同位体比から原産地を推定することが可能です。鉛同位体比によると弥生時代中期の銅鐸や銅矛は朝鮮半島産の鉛を用い、弥生時代後期の銅鐸や銅矛は中国華北産の鉛が用いられたようです。

そして日本産の鉛はまったく認められず、国内では鉛が生産されていなかったと考えられます。銅鐸はどこで、どのようにしてつくられたのでしょうか。遺跡から発見された銅鐸鑄型をみると北部九州からも出土しているものの、その中心は圧倒的に大和、摂津を中心とする近畿地方です。このことから銅鐸とその祭祀は、近畿地方で考案され、周辺地域へ波及していたことわかります。

鑄造方法は、二つの外型と中空の身を造り出すため内型(中型なかご)を用います。二枚の外型をあわせ、内部に土製の内型をおさめて、銅鐸の厚みとなる隙間を厳密に保ち、銅鐸の底面を上部として溶解した湯(青銅原料)を注ぎこみます。出土した鑄型などから扁平鈕式古段階までの銅鐸は、外型に石の鑄型を使用し、扁平鈕式新段階以降は土の鑄型が用いられます。

石の鑄型は鑄型をあらかじめ十分に温めなければ、青銅が鑄型全体に行き届かず、鑄損じ(鑄造欠陥)が生じてしまいますが、うまくいくと内型のみを取り替えて同じ外型から続けていくつも銅鐸を鑄造することができます。現に同じ鑄型から鑄造された兄弟銅鐸(同範銅鐸どうはんどうたく)が多数確認されており、それぞれ遠方から出土するなど、銅鐸を介して地域間の交流を解明する手がかりにもなっています。

北部九州でも銅鐸や青銅製の武器形祭器が鑄造されていますが、北部九州では基本的に終始石の鑄型を用いています。近畿地方が石の鑄型から土の鑄型に移行した背景には、近畿地方が北部九州を介することなく、中国や朝鮮半島と直接交流を持つに至ったことがと推定されます。鉛同位体比による原産地推定も弥生時代後期には中国華北産鉛が使用され、これらによって巨大な銅鐸鑄造が可能となったのでしょうか。

土の鑄型は奈良県田原本町の唐古・鍵(からこ・かぎ)遺跡を中心に出土しています。唐古・鍵遺跡では銅鐸のほかに銅鏃や銅戈、銅剣などの青銅器もつくられ、一大鑄造センターであったと考えられます。その一方で弥生時代後期になると畿内に限らず、近江や東海・北陸地方においても土の青銅器の鑄型や鑄造関係遺物が発見されており、青銅器鑄造が近畿地方の中核部のみでなく、遠隔地の拠点集落などでも行われていたようです。

7 銅鐸の埋納

約 500 例発見されている銅鐸の大多数が偶然の発見によるものです。このため銅鐸がどのように埋納(まいのう)されていたかも定かではありませんでした。近年になってようやく発掘調査で発見される事例が増え、銅鐸の埋納方法も明らかとなってきました。

調査を経て記録された銅鐸の多くは、銅鐸よりもわずかに大きな穴を掘り、そこに鰭を上下として銅鐸を横たえて埋納しています。この方法は最古段階の菱環鈕式銅鐸から新段階の突線鈕式銅鐸まで一貫しており、銅鐸埋納には一定の法則があったことがわかります。しかし、少数ながら天地を逆転して埋めたものなどもあります。



大岩山で見つかった銅鐸 【野洲市教委】

銅鐸は単独で埋められるほかに、多数の銅鐸を一度に埋める場合、一定の範囲に分散して埋める場合があります。島根県の加茂岩倉遺跡からは 39 個の銅鐸が、神戸市桜ヶ丘では銅鐸 14 個と銅戈 7 本がともに埋納され、野洲市大岩山からは、14 個と 9 個と 1 個の銅鐸が近接する 3 つの地点からみつかっています。

また、静岡県浜松市(旧引佐郡細江町)の都田川流域・浜名湖北岸の三方原台地ではこれまで 14 地点から 16 個もの銅鐸がみつかっています。

多数が一度に埋納される際には、大小を「入れ子」したり、鈕を向かいあわせとするなど小さく埋納しようとする意図がみられます。(右図)

なぜ銅鐸を埋納したかについては、土中保管説、隠匿(いんとく)説、廃棄説などの諸説がありますが、複数出土した銅鐸をみると型式的に相前後する銅鐸で構成されており、それらは突線鈕 1 式までのものと、突線鈕 2 式以降のものに分離することができます。

このことから銅鐸埋納は、大きく弥生時代中期後半と後期後半の 2 回の埋納時期があったと考えられます。



8 銅鐸の祭祀と変貌

銅鐸は、銅鐸そのものがもつ意味もさることながら、銅鐸にかかわるまつりが存在していたと考えられます。弥生時代の最大関心事は、米づくりに代表される生産基盤の安定とムラの存続と維持発展にあったと考えられます。耕地の確保といった土木事業を展開する

ためには人々が心をひとつにする必要があり、ここに共同体の祭器として銅鐸のまつりが最もふさわしいと考えられるのです。

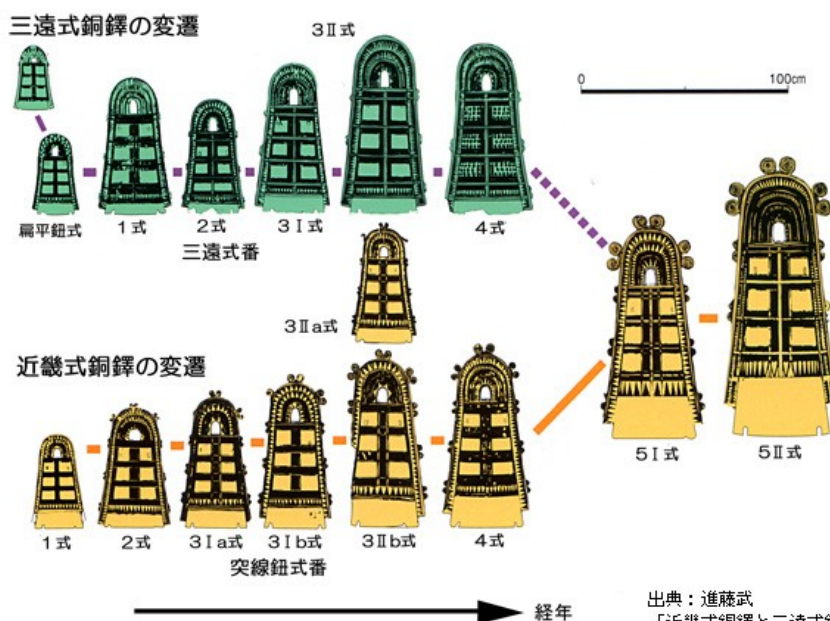
ベルは古くから神々を招き、願いを聞き届けるために重要な役割を果たす儀器であり、シャーマン(司祭者)が銅鐸をもちいて豊穡と祖霊を崇め、ムラムラの発展を祈願する祭祀がとり行われたと思われます。

三品彰英氏は佐原氏の地中保管説を受けて、銅鐸は地霊や穀霊の依代(よりしろ)であり、大地に納めておくことが大切なことであり、銅鐸を掘り出すことは地霊・穀霊を地上に迎えまつること(地的宗儀)で、まつりが終わると再び大地へ埋め戻すもので、やがて古墳時代を迎えると鏡に代表される天の神、日の神のまつり(天的宗儀)にかわり、銅鐸は土中に放置されたと説明されています。

扁平鈕式古段階までの銅鐸は、近畿地方の中でも摂津北部、大和、河内、山城といった畿内を中心に製作され、その分布地から主に近畿以西の西日本に広がっています。
弥生時代中期の段階は、畿内の勢力がより西の地域との連合を意図して銅鐸祭祀を普及させたと考えられます。これが扁平鈕式新段階には、各地に地域的な銅鐸群が生み出されるようになり、銅鐸祭祀は地域ごとに展開したかにみえます。

そして突線鈕式銅鐸の段階になると銅鐸は「近畿式銅鐸」と「三遠式銅鐸」という二つの大形銅鐸にまとまり、分布は畿内周辺部と東海地方へ移っていきます。弥生時代後期、畿内勢力は新しく大きな近畿式銅鐸によって、周辺地域と東海地方への連携施策を講じたものと推定されます。

9 近畿式銅鐸と三遠式銅鐸



弥生時代後期になるとそれまで畿内を中心に生産されていたいくつかの銅鐸製作集団が統合されて、より大きく装飾的な銅鐸が生み出されます。

「近畿式銅鐸」と「三遠式(さんえんしき)銅鐸」の登場です。

近畿式銅鐸は、鈕の頂に双頭渦紋(そうとうかも)をつけ、身の区画帯を斜格子紋で飾ることなど

を特徴とし、近畿地方を中心に畿内の周辺部と紀伊西部、近江、伊勢、尾張、三河、遠江などに分布します。

三遠式銅鐸は、鈕の頂に飾耳がなく、身の横帯には綾杉紋を採用することなどを特徴とし、近畿式銅鐸にやや遅れて成立し、三河、遠江を中心に限られた範囲に分布します。

これらの銅鐸が複数出土したものをみると野洲市大岩山銅鐸を除いて、近畿式は近畿式で、三遠式は三遠式で出土しています。

同じ銅鐸を用いながらも、近畿地方と東海地方ではやや異なった銅鐸を使用しており、それらを近畿、東海勢力の政治的しくみと対立などと解釈する考えもあります。

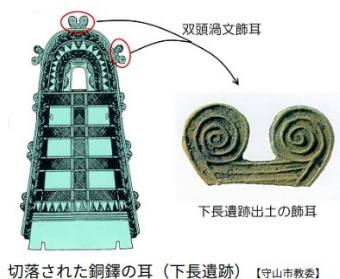
しかし三遠式銅鐸に絵画銅鐸が残り、内面突帯に摩滅痕跡が認められることなどから、三遠式銅鐸は古い銅鐸祭祀を継承するものだと考えられ、近畿式銅鐸は畿内が先導する新たな宗教的・政治的な祭器だと考えられます。

弥生時代中期まで、銅鐸を鑄造していた畿内からは、弥生時代後期の大形銅鐸の出土例が極めて少なく、畿内中枢では銅鐸祭祀から、いち早く銅鏡など用いた新たな祭祀へと移行したようです。一方で、畿内は近畿式銅鐸を用いて、東海地方など周辺地域との政治的連携を模索したようで、三遠式銅鐸が使用していた東海地方では遅れて近畿式銅鐸が入り込んでいます。

10 銅鐸祭祀の終焉

扁平鈕式までの銅鐸は主に畿内で製作され、近畿以西の地域に広がりましたが、弥生時代後期になると大和や摂津のほか、近江、尾張などの拠点集落からも土の鑄型が出土していることから、より広い範囲で銅鐸や青銅器生産が行われるようになります。銅鐸を鑄造する技術は、銅鐸にとどまらず剣や戈、鏃など幅広い武器や装飾品をつくることも可能です。このように畿内が管理掌握していた鑄造技術と製作技術者を周辺地域に放出した背景には、周辺地域との連合を早急に築かなければならない社会状況にあったこと、更に畿内原料を掌握していたことなどが考えられます。

また、近畿式銅鐸に限って破片で見つかるものがあります。また、野洲市大岩山1962年4号鐸は故意に双頭渦紋が裁断されています。近畿式銅鐸の終焉には、故意に壊されて破棄されたものや、(下図)飾耳を裁断して銅鐸を否定するような行為が行われています。



銅鐸が前世の共同体を象徴する祭器であり、新たに台頭した権力者にとっては、邪魔な異物となったのです。

野洲市歴史民俗博物館(銅鐸博物館) 関伽出甕 論考集
「《銅鐸湯沸器説》批判」(4)

1 1 銅鐸の記事

さて以下に、銅鐸あるいは銅鐸ではないかと思われるものの記事を正史およびそれに準ずるような史料の中から、出土した年代順に列挙します。（末尾の書名は出典を表わす）

- {1}（天智天皇）七年(668)戊辰正月十七日。於近江国志賀郡。建崇福寺。
始令平地。掘出奇異宝鐸一口。高五尺五寸。（『扶桑略記』）
- {2}（元正天皇和銅六年(713)七月）丁卯(6日)、大倭国宇太郡波坂郷人大初位上村君東人、得銅鐸於長岡野地而献之。高三尺、口径一尺。其制異常、音協律呂。勅所司藏之。（『続日本紀』）
- {3}（聖武朝(724-749)）地中得五尺宝鐸。（『元亨釈書』卷第二十八、寺像志、石山寺条）
- {4}（嵯峨天皇弘仁十二年(821)）五月丙午(11日)。播磨国有人。掘地獲一銅鐸。高三尺八寸。口径一尺二寸。道人云。阿育王塔鐸。（『日本紀略』／『日本逸史』）
- {5}（仁明天皇承和九年(842)六月）辛未(8日)。若狭国進銅器。其体頗似鐘。是自地中所掘得也。（『続日本後紀』）
- {6}（清和天皇貞観二年(860)八月）十四日辛卯。参河国献銅鐸一。高三尺四寸。径一尺四寸。於渥美郡村松山中獲之。或曰。是阿育王之宝鐸也。（『日本三代実録』）
- ※『続日本紀』は延暦十六年(797)の、『続日本後紀』は貞観十一年(869)の、『日本三代実録』は延喜元年(901)の、『扶桑略記』は12世紀後半?の、『日本紀略』は平安末期の、『元亨釈書』は元亨二年(1322)の、『日本逸史』は元禄五年(1692)のそれぞれ成立。『

次の三つの史料と記紀の成立年代の時代順に検討します。

- ①『丁卯。（713年＝和銅6年7月）大倭国芋太郡波坂郷の人、大初位上村の君、東人、銅鐸を長岡の野地に得て、之を献ず。高さ三尺、口径一尺。其の制、常に異にして、音律呂に協（かな）ふ。所司に勅して之を蔵めしむ。』（「続日本記」巻九、元明天皇）7世紀後半に銅鐸出土の記事
- ②『戊辰（668年＝（天智7年）正月十七日。近江国志賀郡に於て崇福寺を建つ。始めに地を平らかならしむ。奇異の宝鐸一口を掘り出だす。高さ五尺五寸。又奇好の白石を掘り出だす。長さ五寸。夜、光明を放つ。』（「扶桑略記」第五 — 平安末、皇円撰、1094年以降成る。）
- ③『或ハ云、天智帝ノ御宇ニ三井寺ヨリ古銅器ヲ掘り出ス、当時何物ヤ詳ナラズ、マヅ神代ノ物ト定リタルヨシ、今誓願寺ニ納マル、此物ト異ナル事ナシトイフ。』（ともに天智天皇（在位 662～671）の時代で、出土地は近江の国。当然、近江朝の官人たちのあまねく知るところとなろう。

1. ② 戊辰（668年＝（天智7年）正月十七日
（『扶桑略記』皇円撰、1094年以降成る。）
2. ③ 天智帝ノ御宇二三井寺ヨリ古銅器ヲ掘り出ス（江戸時代の「丹寄府志」）
3. 「古事記」成立 712年（和銅5年）
4. ① 丁卯。（713年＝和銅6年7月
5. 「日本書紀」成立 720年（養老4年5月21日・元正天皇）（続日本紀）

つまり、「古事記」の編纂関係者も「日本書紀」の編纂関係者も銅鐸の存在を知らぬはずはなかったと考えられます。しかし、「古事記」にも「日本書紀」にも銅剣・銅矛は登場するが、銅鐸は一度たりとも登場していません。

『日本書紀』の叙述、それはいいかえれば、元明、元正天皇の時代の歴史認識の表現です。だから、そこに「銅鐸がない」という事実は、先の一句を裏づけるものであり、やはり、`現代のわたしたちの朝廷にもなく、わたしたちの先祖代々の伝承にもなかった奇怪なもの"そういう意味の一句としてうけとる以外の道はないとの意味にとれます。

記紀の編者たちは、銅鐸の存在を知っていた。にもかかわらず、それ自身は全く記紀中には姿を現わしていません。このような状況では、記紀をもって、わが国の古代史を代表させることは、史書として、誠に不安があります。

六～八世紀の近畿天皇家の史官 「記紀の編者たちは、『銅鐸』という奇怪な古物が出土する事実を知っていた。しかし、なぜそれを題材とした『銅鐸の神話』や、『銅鐸の説話』を、彼等は『造作』しなかったのか」「どんな不都合があったのか」

1 2 銅鐸の用途及び出土地

銅鐸あるいは銅鐸ではないかと思われるものの記事

{1}（天智天皇）七年(668)戊辰正月十七日。於近江国志賀郡。建崇福寺。

始令平地。掘出奇異宝鐸一口。高五尺五寸。（『扶桑略記』）

{2}（元正天皇和銅六年(713)七月）丁卯(6日)、

大倭国宇太郡波坂郷人大初位上村君東人、得銅鐸於長岡野地而献之。高三尺、口径一尺。其制異常、音協律呂。勅所司藏之。（『続日本紀』）

{3}（聖武朝(724-749)）地中得五尺宝鐸。

（『元亨釈書』卷第二十八、寺像志、石山寺条）

{4}（嵯峨天皇弘仁十二年(821)）五月丙午(11日)。

播磨国有人。掘地獲一銅鐸。高三尺八寸。口径一尺二寸。道人云。阿育王塔鐸。（『日本紀略』／『日本逸史』）

{5}（仁明天皇承和九年(842)六月）辛未(8日)。
若狭国進銅器。其体頗似鐘。是自地中所掘得也。（『続日本後紀』）

{6}（清和天皇貞観二年(860)八月）十四日辛卯。
参河国献銅鐸一。高三尺四寸。径一尺四寸。於渥美郡村松山中獲之。或曰。是阿育王之宝鐸也。『日本三代実録』）

※『続日本紀』は延暦十六年(797)の、『続日本後紀』は貞観十一年(869)の、『日本三代実録』は延喜元年(901)の、『扶桑略記』は12世紀後半?の、『日本紀略』は平安末期の、『元亨釈書』は元亨二年(1322)の、『日本逸史』は元禄五年(1692)のそれぞれ成立。

『続日本紀』は岩波書店 新日本古典文学大系本に、それ以外は『新訂増補国史大系』本によった。これらのうち、成立がもっとも古いのは{2}で、これが「銅鐸」の正史初出とされています。

宇治谷孟訳『続日本紀[上]』（講談社学術文庫、1992年6月10日第1刷発行、p143）

七月六日、大倭国宇太郡波坂郷の人、大初位上の村君東人は、長岡野の地で銅鐸を得て献上した。高さ三尺・口径一尺で、その造りは普通と異なっており、音色は律呂（楽のきまり）にかなっている。そこで担当の宮司（雅楽寮）に勅して収蔵させた。

ようするに、8世紀始めの人々も、出土した「銅鐸」を鳴らす物と考えていたということ。（岩波書店 新日本古典文学大系本『続日本紀 一』p202 脚注三によると、「雅楽寮」ではなく「大蔵省」に収蔵されたとする説もあるらしいが……）また、これを見ると、平安時代になると、銅鐸を仏教に結び付けようとする傾向がうかがえますが、それでも、鳴らす物（あるいは、鳴らしたであろう物）と、各時代の人々が一貫して考えていたことは十分想像できると思います。

このように、古い記録を用いて歴史学的アプローチを試みると、「銅鐸楽器説」がもっとも有力な説だと思えます。

しかし、岩波書店 新日本古典文学大系『続日本紀 一』補注6-一八(p428)には、《弥生時代の祭祀具としての銅鐸は、同時期の祭祀具たる鏡・剣・玉などがその後も宝器・祭具として尊崇されたのに反して早くその伝統が失われ、本来の用途が忘却されて奇異な出土物として観念され、平安時代には、インドマウルヤ王朝のアショーカ王が各地に建てた宝塔と結びつけ、銅鐸を阿育王の宝鐸とする考えが行われた》とあり、「用途不明！」としている歴史学者が少なくないことも、また、事実です。

結局、銅鐸の同時代史料が存在しないため、歴史学では、その用途を特定することができない、すなわち、「銅鐸楽器説」が定説化しないというのが現状のようです。

1 3 荒神谷遺跡発見の意義

銅鐸の生産が開始された年代に関しては、大別して、中期中頃か遡っても前葉という説と、前期末あたりまで遡るという説の二つに分かれます。

前者はおもに九州出土の銅鐸形土製品や鋳型(ただし、福田型)・小銅鐸にともなう土器が中期中頃を遡らないという事に基づいており、柳田、寺沢など、おもに九州の考古学研究者を中心に支持されています。

一方の後者は、佐原、春成などが支持する説で、佐原氏本人は銅鐸と畿内の土器の流水紋の類似を根拠としています。後者の説は、かつては銅鐸のみならず青銅器の生産自体が前期に遡ることがありそうにないということで批判されていたようです。

★ 堅田遺跡(和歌山)、吉野ヶ里遺跡(佐賀県)、庄原遺跡(福岡県)などで中期初頭から前期に遡る可能性がある青銅器の鋳型が次々と発見され、青銅器の生産開始は前期まで遡る可能性が高くなりました。

したがって、銅鐸鋳造が前期に遡ってもまったく不思議ではない状況にはなっています。特に、上の表にある田能遺跡の剣形祭器鋳型はピットからの出土で、土器の出土状況は混在したとは考えられないということなので、畿内の青銅器生産の開始が中期前半に遡るのはほぼ確実なようです。

★ 銅鐸も、京都府向日市の鶏冠井(かいで)遺跡では菱環鈕式か外縁付鈕式と見られる

★ 銅鐸鋳型が中期前半の土器を含む土層(※)河道跡からの出土から出土しており、また、瓜生堂遺跡でも中期前半とみられる銅鐸形土製品が出土しています。

さらに、少し離れますが、福井県の

★ 加戸下屋敷遺跡(東尋坊のすぐ側)では、 未完成の銅鐸鋳型が中期初頭の土器を伴って出土しています。

★ 加戸下屋敷遺跡はII期またはIII期初頭の単純遺跡だということなので、年代推定の確度が気になる所ではありますが、中期初頭に既に銅鐸が生産されていた可能性はかなり高いものと考えられます。

★ また、2004年には濃尾平野の朝日遺跡で中期前葉の土器を伴って菱環鈕1式と見られる石製の銅鐸鋳型片が出土しました(現地説明会報告)。朝日の鋳型片は熱によるひび割れがあり実際に鋳造に使われていたことが確認できるもので、砥石として利用された痕跡もあることから、この鋳型による銅鐸の鋳造年代は土器の年代よりもさらに上がると予測できます。集落内土坑の埋土中からの出土ということなので、年代について特に疑問はないように思われます。

これらの事例から考えて近畿地方およびその周辺地域での銅鐸鑄造開始が中期前葉以前に遡ることがほぼ確実になってきたと思われます。

(※)河道跡からの出土。河道跡は、下層(I+小数の II)、中層(少数の II+III 前半)、上層(III 前半)の3層からなり、鑄型片はこの中層から出土した。

(※)新聞記事では、東奈良遺跡で 1999 年に出土した小銅鐸が、朝鮮式小銅鐸の特徴を持ちつつ、かつ、日本の銅鐸の特徴も合わせ持ち、紋様が弥生前期の土器に特徴的な紋様であるなどの理由で前期に遡る現存最古の銅鐸であるという説があります。

その一方、一例を除き(後述)、九州では中期中頃を遡る資料が出土していないという事は上の表のとおりで、九州での銅鐸の生産開始が中期中頃であるのもかなり確かなことであらうと思われます。

この二つの説は、畿内で前期終わり頃に銅鐸生産がはじまり、後に九州に伝わったと考えればうまく接合するのですが、そうすんなりとはいかないのは両方で銅鐸の起源に対する見解の相違があるためです。

弥生時代は、何事も、稲作でも青銅器の鑄造でも弥生式土器の製作でも、半島から九州に伝わり、九州から東に伝播したとするのが一般的です。したがって、銅鐸といえどまず九州で生産され、その後東に伝わり、そこで流行をみたとするのが自然であるということになります。そして、九州の銅鐸が中期中頃を大きく遡らないのだから、畿内の銅鐸もそれより古くはならない、という論法になります。

この説では、銅鐸は、朝鮮式小銅鐸→小銅鐸(大谷遺跡例)→福田型→菱環鈕式と変遷したと考えるようです(※)。

一つ問題となるのは、詫田西分貝塚出土の銅鐸形土製品で、これが中期前半の土器を伴っているということです。銅鐸生産が中期半ば以後と見る立場では、この土製品は朝鮮式小銅鐸を模したものとみなし、銅鐸生産が中期中頃以後でも矛盾はないとするようです。

しかし、佐原氏によればこの土製品には身に型持ち穴が二つあるので、あきらかに日本の銅鐸を模倣したものなのだそうです。佐原氏が正しければ、この土製品は少なくとも日本のどこかで中期前半までに既に銅鐸の生産が行われていた証拠の一つということになります。(※)佐原氏は、小銅鐸と福田型の間の断絶が大き過ぎる、形式学上、福田型が菱環鈕式に先行することはない、と批判されています。

一方、前期まで遡るとする説では、外縁付鈕式の流水紋が畿内第 II 様式の流水紋の特徴と一致しており、第 III 様式の流水紋とは異なるという事実から、外縁付鈕式は中期初頭(II 期)であり、その前にもう一形式菱環鈕式があるので、生産開始は前期末に遡ると考えます。

そして、この事実を基礎にして、九州の生産が畿内と同等まで遡らないならば、銅鐸の生産に限っては畿内から九州に伝わったと考える事になります。初めから“九州の方が古い”という枠をはめてしまうやり方には少し疑問がありますし、かといって、流水紋の比較だけで本当に大丈夫なのか？という気がします。

しかし、上述のとおり、中期前半以前に銅鐸生産が遡ることを支持する資料は徐々に増えつつあります。もう少し資料が増えていけば、自ずから事は決するのではないでしょう
か。また、銅鐸生産が九州からはじまったと考える場合には、九州出土の銅鐸から菱環鈕
式へという形式学的なつながりが成立するのかどうかについてもさらに検討していく必要
があるようです。

1 4 県立考古博物館：銅鐸破壊、どうやって 技術解明しようと
実験――播磨町 / 兵庫

◇豊岡・久田谷遺跡からも碎片

銅鐸（どうたく）はなぜ、どのように壊されたのか――。弥生時代の祭器とされる銅鐸が、人為的に壊された謎に迫ろうと、県立考古博物館（播磨町大中、石野博信館長）で8日、銅鐸破壊実験が行われた。三つの手段を駆使した末、粉々になったものの、破片の形状などが出土した銅鐸片とは異なることから、「破壊に使う道具などの検証がさらに必要」とされた。【成島頼一】

銅鐸の出土は、これまで北部九州～東海地方で約470カ所。うち大阪、鳥取など約30カ所では、壊された状態で見ついている。豊岡市の久田谷遺跡では粉々になった117片（1辺4～10センチ）が出土した。

石野館長らは「弥生後期末の卑弥呼登場期に、銅鐸をまつる『カミ』を否定されたことが破壊行為につながったのではないか」とし、考古博のボランティアらが、銅、スズ、鉛が成分で簡単には割れない銅鐸の破壊技術解明の実験を企画した。

石野館長の講演「銅鐸は殺されたか」に引き続き実験が行われ、東大阪市の合金会社が無償で作った複製品（高さ47センチ、重さ約7キロ）を使用。

（1）木づちでたたく

（2）たき火で10分間加熱後、水で冷やす

（3）（（2）の作業後に）木づちでたたく――の3方法で実施した。

この結果、（3）でやっと割れたが、出土例のようにそろった大きさにならず、破片は小ささまざまで、断面も出土品より鋭角だった。

石野館長は「銅鐸は通常厚さ2ミリで、複製品は3ミリ。厚みと熱し方の問題でなかなか割れなかったのではないかと。化学者も交えて当時の破壊技術を検証したい」と話している。

15 古代工人は薄肉の銅鐸をどのように鑄造したか。

「銅鐸の厚み」が大変薄いのに気が付きます。各地で発掘された銅鐸も、3mmあるいはもっと薄いものまでとも言われています。現代の技術をもってしても、このように薄い銅の鑄物を欠陥なしに製造することは容易ではありません。古代の技術者達が、どのような方法でこれを実現していたのかは、今もって大きな謎の一つです。

現代の美術品鑄造家の一人である小泉武寛さんが銅鐸の復元製造を実施。

硬さは材料の強さに関係します。表面に生じた硬い部分をうまく利用して、鑄造品内部に溜まった応力を抑制しているのかも知れないし、薄い銅鐸をつくる一つの意味が、ここにもあったのかも知れません。そのバランスが崩れれば割れます。（実際に）割れた銅鐸が発掘されることもあります。「叩いて壊した」のだという説までありますが、科学的解明がこれらの説を否定することになるかも知れません

「古代技術者達の優れた知恵と経験に敬服せざるを得ない」

この銅鐸は「福田型銅鐸」であり、島根県で出土した「木幡家所有銅鐸」と同じ鑄型で作られた兄弟銅鐸であることがわかった。福田型銅鐸の鑄型は佐賀県や福岡県で見つかり、九州で作られた銅鐸が中国地方まで運ばれたと考えられる。（資料提供：佐賀県教育委員会）

奈良の大仏。重量が約250トン、高さ14.87m、螺髪数966個という巨像大仏は見る人を圧倒し、そして人の心を魅了するのであらうと思います。その巨像大仏は建立の詔勅から光背の完成までに28年間を要し、西暦771年に完成した。一度に、合計の重量が、260キログラムもある銅鐸がみいだされた例がある。それは、青銅の素材としても、魅力あるものと考えます。 滋賀県野洲の銅鐸博物館

16 銅鐸と日本文化 森浩一

日本での銅鐸の発生については、弥生前期説と弥生中期説に分かれています。弥生前期説をあげる人には近畿地方が古いという先入観があるように私には感じられます。それから弥生中期説をあげる人は佐賀県あたりで発生したのではないかと推測しています。佐賀県では工房（竪穴住居址）の中から銅鐸の鑄型が出ています。

その鋳型といっしょに、そこで作っている銅剣の年代とかいっしょに出てくる土器の年代でそれは弥生中期後半ということが分かりました。

ただし一番古い銅鐸の少し後ぐらいです。だから、もう少し前から銅鐸があってもいいので中期説です。つまり中期説は北部九州起源論です。私は北部九州起源論をとっています。遺跡学から言うと中期説しか出てきません。遺物学の方は推定を重ねているわけです。しんどいけれどもやはり遺跡の中でものを考えなければいけません。

鋳型というものは1回銅を流しますとバラバラになりますから、同じ鋳型からはできないのです。だから同じ元型からコピーするわけです。

全く同じものが加茂岩倉遺跡から4個出ています。たまたまそれと同じものが、私が前に掘りました和歌山市の太田・黒田という所から出ていました。

今日持ってきたものは和歌山市の太田・黒田のものの模型です。これと寸分変わらないものが加茂岩倉遺跡から4個出ましたので、合計5つの銅鐸が兄弟関係にあるわけです。

銅鐸の発見の歴史

銅鐸という用語は実は奈良時代の初めにでき上がった学術用語なのです。

『銅鐸』という言葉は銅鐸の発見の第一号の時にすでにその言葉が使われていたことです。

奈良時代の和銅6年（713）に大和の国で高さ3尺の大きな銅鐸が見つかりました。三河地区からよく出る大きさの銅鐸です。発見第一号の奈良時代の銅鐸は銅鐸と書いてあるだけではなくて、音が律呂にかなうと書いてあります。

「律呂にかなう」とは中国の音楽の法則に基づいたいい音だということなのです。

これは皆さんが続日本紀をお読みになるとすぐ出てきます。ところが江戸時代に銅鐸はかなり見つかっていてよく庄屋さんの日記などに出てきます。その日記にはほとんど銅の釣鐘が見つかったと書いています。奈良時代の役人にくらべて江戸時代の庄屋さんの方が漢字は書けるのですが、中国の漢文学の素養では一段階低いようです。

そういう意味では奈良時代の役人の教養はものすごく高いのです。なぜかというと、釣鐘、鐘というものは外から叩く、外に発音装置があってお坊さんがよく撞木（しゅもく）でボーンと叩いております。それに対して、鐸というものは中にすりこぎのような物（舌（ぜつ））がぶら下がっていて、これを揺らすと音が鳴ります。その物の内部に発音装置を備えているのが鐸です。我々は風鈴と言っていますけれども、風鈴は言い換えれば風鐸です。風鈴をいちいち叩いている人をあまり見たことがありません。風鈴は中に短冊か何かがぶら下がっていて風に揺れて鳴ります。もし風鈴が銅鐸のような形をしていけば小さくとも風鐸です。

事実、奈良時代のお寺の建物の隅にぶら下げてあったものは風鐸と言います。日本のお寺では音がしていないけれども、インドネシアやタイあたりのお寺へ行ったら、もう風鐸が何十もぶら下がっていて、ものすごい音を聞かれた方もおられるでしょう。

日本のお寺も本来そのようなもので、奈良時代頃はお寺には風鐸がいっぱいぶら下がっていて、たえなる音を出していたのです。だから銅鐸は中国の漢字にかなった使い方をすでに奈良時代の人達が正確にしていたのです。

860年（貞観2年）、ご当地の渥美半島の村松という所で、銅鐸が見つかっています。これも『三代実録』に銅鐸と書いてあります。高さ3尺4寸と書いてありますから、1メートルほどの大きい銅鐸です。1メートルほどの銅鐸と言いますと春日井の市役所の入口にたしか模型が置いてあります。あれは数年前に春日井のお寺に行ったら江戸時代に出たものがバラバラのまま置いてあったのです。

このままでは形もわからないし、40ほどの破片になっていますので、散逸する恐れがありました。そこでお寺さんと、檀家さんと、それから市長さんに相談しました。そして、春日井市でばらばらの銅鐸を復元する予算を付けてもらいました。その時にひとつコピーをこしらえて、そのコピーの方を市役所に置いてあるのです。

高さ98センチです。「春日井の銅鐸」をどうぞ見ておいて下さい。出土したところは、神領という大きな弥生遺跡で、まだあまり発掘は進んでいません。庄内川の右岸で、将来マークする必要がある地域です。1メートル前後が大型ですので、98センチというと銅鐸の中では大型の部類に属します。銅鐸の一番大きなのは滋賀県に高さ134センチというのがあります。これは超大型です。例外的に大きい。今日持ってきた30センチぐらいのものは中型で、10センチぐらいのものが小型です。

銅鐸の種類には、小型銅鐸、中型銅鐸、大型銅鐸、超大型銅鐸があります。それから小銅鐸と別と呼んでいるのがありますが、これはまわりに鱗（ひれ）がなくて、小さいのは4センチぐらいです。小銅鐸の方は、銅鐸がなくなった後もしばらく作り続けています。例えば千葉県あたりでは古墳時代になっても作っています。古墳の中へ小銅鐸を副葬品として入れています。

小銅鐸と銅鐸を混同するとややこしくなりますので、区別しておく必要があります。

次に江戸時代まで入れますと、合計4、50の銅鐸の発見の記録が残っています。なお少し参考に言いますと6、7年前に亡くなりましたが、愛知県の西尾の公民館に勤めてみえた方で宮地邦男さんという方がおられました。この方は銅鐸の研究者として有名な人です。ただし銅鐸そのものの研究はしていません。宮地さんは、「銅鐸そのものはプロの学者がおやり下さい。私は銅鐸の出た所を研究します」と言って、江戸時代の銅鐸の出たような所を徹底的に廻って調べました。

銅鐸の出土地を一番たくさん見た人が宮地さんです。亡くなる前に彼が集めたコピーしたものや書いたものを私にゆずってくれました。だから私は、宮地資料として、1箱に入れて、銅鐸好きな大学院生でもでてきたら整理させようと思っています。彼は亡くなる直前に持っていた考古学の本を韓国のある大学にすべて寄附しました。このように、宮地さんはなかなかの研究者です。

大野安麻呂いつ死んでとずっと字が書いてあるのですが、あの墓誌も自然銅を伸ばしていると言われています。だから銅山で鉱石を掘り出して溶かすのは、奈良時代ぐらいになってからではないかと思います。

加茂岩倉遺跡で出土した一番いい銅鐸は2ミリです。現在2ミリで全部鋳物で仕上げる技術はありません。日本のトップレベルの技術者がいくら挑戦してもできないのです。現在の技術では厚さが5ミリぐらいが限度です。

その後鳥栖では別の遺跡からも古い銅鐸の鋳型が出ました。その模様が今度の加茂岩倉遺跡で見つかった一番見事な海亀が泳いでいる絵が書いてある銅鐸（10号銅鐸）と共通する部分があります。

すごい銅鐸です。2ミリで仕上がっているもので、佐賀県の鳥栖の本行（ほんぎょう）遺跡から出ました。したがって出雲の銅鐸にも九州の影響が入っているのです。

1 7 荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡の秘密

銅鐸 青銅器に関するヒント 鏡・銅鐸

1. 位置 荒神谷一大山剣が峰 荒神谷一仏経山一夜須（安＝神功紀の羽白熊鷲）
高原の最高所三箇山（大山に三鉢山）三角点

加茂岩倉一大己貴神社 加茂岩倉 大山 大黒山

2. 大己貴の意味 三輪山の神 箸墓、出雲大社＝大国主命 八王子山（天智）
出雲大社の祭神大国主神の別名は大己貴神＝三輪山の神→崇神天皇に崇る

3. 「×」印 出雲大社の御神紋の剣との類似 銅鐸にもある

4. 銅鐸 神功摂政前紀……安＝夜須→野洲→大岩山古墳群と銅鐸の出土
清和天皇陵→宗福寺跡＝銅鐸出土……地点3重の入れ子
八王子山→日吉大社西本宮一野洲の銅鐸出土地点

発掘開始まもなく、銅剣出土地点よりも7メートルほど谷奥へ行った場所では発見された。埋納坑中央に対して鈕を向かい合わせる形で2列に並べられていた。

分類としては、最古の形式であるⅠ式（菱環鈕式）が1つと、それよりやや新しいⅡ式（外縁付鈕式）の形式のものが1個、外縁付鈕Ⅰ式3個が出土している。

製作時期は、弥生時代前期末から中期中頃の間と考えられている。

文様に強い独自性がみられる1つを除いては、同形式の銅鐸の鑄型の分布からみて近畿産とする説が有力である。

12年後に出土した加茂岩倉遺跡の39口の銅鐸との関連性を考慮すると、一概に畿内製造であるとは言い切れなくなっている。北部九州製の可能性が高い。

三号銅鐸は伝徳島県出土銅鐸と同範であることが確認されている。

二号銅鐸が京都市右京区梅ヶ畑遺跡出土の四号銅鐸と同範であることが判明した。

なお6個の銅鐸の高さが20センチと同じである。

解説：『元亨釈書』（げんこうしゃくしょ）は、日本の歴史書。鎌倉時代に漢文体で記した日本初の仏教通史。著者は臨済宗の僧、虎関師錬（1278年 - 1346年）。全30巻。

元亨2年（1322年）に朝廷に上呈されたので、書名に「元亨」が冠せられる。「釈書」は釈、つまり仏の書物。収録年代は、仏教初伝以来、鎌倉後期まで700余年に及び、僧の伝記や仏教史を記す。南北朝時代に大蔵經に所収された。

解説：『扶桑略記』（ふそうりゃくき）は、平安時代の私撰歴史書。総合的な日本仏教文化史であるとともに六国史の抄本的役割を担って後世の識者に重宝された。

寛治8年（1094年）以降の堀河天皇代に比叡山功德院の僧・皇円が編纂したとされるが、異説もある。全30巻よりなり、このうち巻二から六、巻二十から三十の計16巻と、巻一および巻七から十四の抄記が現存する。

解説：古事記（こじき、ふることふみ、ふることぶみ）は、一般に日本最古の歴史書であるとされる[1]。その序によれば、和銅5年（712年）に太安万侶が編纂し[2]、元明天皇に献上されたことで成立する[3]。上中下の3巻。内容は天地開闢から推古天皇の記事である。

解説：『日本書紀』（にほんしよき、やまとぶみ[1]、やまとふみ[2]）は、奈良時代に成立した日本の歴史書。養老4年（720年）に完成したと伝わる[3]。日本に伝存する最古の正史で[4]、六国史の第一にあたる。神代から持統天皇の時代までを扱い、漢文・編年体で記述されている。全30巻。系図1巻が付属したが失われた[5]。